

イエスはまなり



日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈禱運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕 166号

「聖言に聴き従う恵み」

ヨハネ福音書6章63節

脇田 真一



クリスチャンは喜び、平安、希望等の言葉をよく申しますが、私は若き日、このような言葉を聞く度に、その人は本当にそのように思っているのであろうかとよく疑いました。その当時、私にはそのような喜び、平安、希望等という体験は全くなかったので、そのような言葉はクリスチャンの単なる口癖ではあるまいか、それを本気で語っているのかどうかその人の顔をじっと見つめておりました。

私は長い年月、信仰書を読み、人の証しを聞き、集会にもよく出席しまして、キリスト教の知識だけは良く知っておりましたが、それは結局、頭だけの、知識だけの信仰でありました。そこには、命がなく、力がありません。聖言に聴き従うということが信仰の成長には欠かせないということに気が付かなかったのです。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」(ヨハネ6:63)とあります。聖言には命があり、力があります。

問題に直面し、神に祈り、聖言が与えられた時、素直に聴き従う。祈り、与えられたのは、神の聖言であるから、損をしても、得をしても断じて聴き従う、どのような結果に成ろうとも、構わないと決断して聖言に聴き従う時、夢想だにできなかった現実が現れ、神は生きておられると全身全霊で言わずにはおられないことを何度も体験しました。この聖言に聴き従う体験を積み重ねている間に、いつの間にか、信仰が成長していることに気がつきました。ある時、私は行きづまりを感じ、深く自分の心を探りました。私は神を踏み台にし、神を利用して自分の欲望や幸せを達成しようとする自己中心の人間であることに気づき、神様に心からお詫びしました。その瞬間、今までどうしても信じることの出来なかった復活を信じる者とされたことに気が付きました。今では、キリストにあって、喜び、平安、復活を腹の底から信じ、告白出来る者とさせて戴いていることの不思議さと恵みに心から感謝せずにはおられません。イエス様はゲッセマネで「わたしの願いどおりではなく、御心のままに」(マタイ26:39)と祈られました。ゲッセマネの祈りは私の祈りとはその質が違うとは思いますが、ゲッセマネの祈りを我が祈りとさせて戴ける信仰生活をさせて戴きたいと切に祈り、願う者であります。

(大阪住吉教会牧師 脇田 真一)

霊 想



「労苦と焼けるような暑さの中での神の恵み」

マタイ20章1〜16節

大分恵みキリスト教会

岡山 敦彦

ぶどう園の主人は、ぶどうの収穫の時、労務者たちを雇うために市場に出かけました。一度に多くの労務者たちが必要でした。なぜなら秋の雨が降り始める前にぶどうの収穫を終えなければ、ぶどうの実の糖度が落ちて品質が悪くなり、大損害を受けることになるからです。早朝、朝九時、午後一二時、三時、五時と、主人は何度も市場に足を運ぶのは、労務者たちを雇って、自分のぶどう園で働かせました。

一日の労働が終わって、その日の賃金が支払われる時が来ました。まず夕方五時に雇われた人たちに、日当の一デナリが支払われました。彼らには思いがけないことでしたが、主人に感謝し、喜んで我が家に戻っ

て行きました。他の人たちも同様に一デナリを受け取りました。最初に雇われた者たちが、賃金を受け取る時、自分たちには割増の日当が払われるものと期待しましたが、他の人たちと同様に一デナリでした。彼らは怒り心頭で、主人に文句を言いました。「最後の一時間しか働かなかった連中と、自分たちがなぜ同じ賃金なのか。私たちは、労苦と焼けるような暑さを辛抱して働いたのです」。彼らの言い分は当然でしょう。

さて、この日当の一デナリは、労働に対する対価ではなく、主人(神様)からの恵み、賜物と考えるべきです。神様は、私たちの働きにかかわりなく、一方的に恵みを与えてくださる方なのです。すなわち罪の赦し、救いの恵み、永遠のいのちの約束です。神様からの恵みは一方的で、私たちがただ感謝して受け取るべきものです。

さて、ぶどう園とは、広く解釈すれば神の国のことで、そこで働く労務者たちは、キリスト者たちのことです。朝早く雇われた人たちは、確かに炎天下のぶどう園で労苦と焼けるような暑さを辛抱して働きました。しかし、彼等にも感謝すべきことはいくつもあったはず。朝早く雇われたので、明日の家族の食事や生活の心配を

せずにその日一日を心平安に過ごすことができました。午後五時に雇われた人たちは、朝からその時刻までどのような思いで過ごしたことでしょうか。もし仕事にありつくことができなければ、明日の日用の糧をどのようにして調達すれば良いのか悩みながら悶々とした時間を過ごしたに違いありません。今の不況の時代、仕事をしたくても就職できない人がたくさんいます。彼らは、明日のことよりも今日の仕事のことと悩み続けています。

一日中働いた労務者たちは、労苦と焼けるような暑さを辛抱したことを強調していますが、その働きの中に喜び、感謝もあつたはず。日中の暑さの中で飲んだ一杯の冷たい水のおいしさは、格別なものであり、空腹であれば、心から感謝して食べました。また、午後の休息の時には、お互いに交わり、家族のことを話しあい、共に働く者どうしの友情を深めることができたはず。主のぶどう園すなわち神の国で働くことは、素晴らしい神の恵みに満ち溢れているのです。教会でのキリスト者どうしの交わりは、この世の交わりとは比較できないほど神の恵みに満ち溢れています。

私は大学一年生の時に信仰へと

導かれましたので、朝九時ごろに雇われた労務者のようです。信仰が与えられ、神のぶどう園で働かせていただいで四五年近くなります。その間、神様から何と多くの恵みを受けたことでしょうか。その一つは、信仰の友です。彼らは、この世の財産や社会的名誉以上の神の恵みそのものです。そして、今確かにキリストによる神の救いと永遠のいのちの約束が与えられていることを感謝しています。

主人に文句を言った人たちこそ、一番神に感謝すべき人だったので。「あとの者が先になり、先の者があとになる」。それは、すべて神様のご計画の中でなされる順番にすぎないので。

証 初めのアシュラム

函館栄光教会

片山 英昭

長い間、あるニードが与えられていた。せまられて数日間の断食祈禱も繰り返していたこともある。そのため、17年前、初めてアシュラムに参加した。アシュラムが始まりとうとう開心の時が来た。自分のニードを述べねばならぬ。これが辛かったのである。私の強いニードとは、受洗して30年以上もたっており、教会で役員もしており、いや、そんな

ことより自分自身へのせまりとして、イエス様の十字架の愛をまったくわかっていないということなのであった。長い間刃物を突きつけられていたようであった。いまさら、じつはそのために来た、なんて言えたものではないと恥ずかしかつたのである。おまけにそうそうたる教職、信徒の方々のまえである。白川先生にも恥をかかせることになる、等の思いで順番が来るまで硬くなり迷いを持つた。しかし、ごまかしては来た意味がない。情けないほど小声でオドオドながらも語った。そのとき皆様が一瞬しらけたかのように私には思われ、やっぱりやめておけばよかったと少しく惨めな思いにとらわれた。もちろんこれは私の思い過ごしなのだが。しかし、アシラムの交わりなかでの平安とうれしさはあったがニードの応えは与えられず、最後の朝となった。集合時間に遅れ、あわてて飛び起きた。顔など洗うどころではなく、ボサボサ頭、髭面、口もゴワゴワのまま渡り廊下の先の会場までヨタヨタとたどり着いたときに皆様のうねるような歌声が聞こえてきた。アシラム聖歌集の23番「主はわが牧者」である。こそこそと後方の引き戸を開け、一番後ろのあいっている机のハジに座り、やれやれと歌おうとするが声が出ない。寝ほけており、疲れと起きぬけでかすれた

声は抑揚もないどころか息も絶え絶えである。と、次の瞬間、わたしの奥深くから力強い賛美が忽然とあがった。「ワガ主 ガ トモニ ハルーヤ オラレール カラダー ハレルーヤ」 イエスさまだ。すぐにわかった。私はひきずられるように腹のそこから張り裂けんばかりの声でうたった。心からの喜びに満ちあふれてである。

アシラムは信仰のある者のさらなる励ましのみではない。私のように信仰もなく、真の悔い改めなどみじんもないもののためのものであるような気がする。罪のゆえの永遠の滅びと恐ろしい神なき絶望の姿を示されたことがある。しかし、イエス様は深い罪意識の中でのみ出会う方ではなく、それがどんな人たちであれ、つらい悲しみと痛みを持つものすべての求めに会いわれそして導かれるような気がする。

イエス様の十字架の贖いがなかったならば神の御臨在も光もない。私の目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛しあなたの身代わりとして人を与える（イザヤ書43）「どんなに困窮したときも、気落ちした時も必ず光と喜び、勇気をくださる共におられる愛なる神の御言葉である。」

平安

第49回関東アシラム報告

安藤 脩



2011.9.20 第49回関東アシラム

1ペトロ2章
2節で、助言者として岡山敦彦師をお迎えしました。岡山師は現在、九州アシラムの大事な責任を負っています。そして九州アシラムの開催中にもかかわらず、後半のプロگرامを委ねて、私どものアシラムへ駆けつけて下さいました。感謝でした。

岡山師は「最後の者にまでおよぶ愛」を体験から語られた。更に「これは主の目に小さい事だ」と題して、人の目と、神の目では事の大きさが逆になると、御自身の絵画を見る目も交えて語られた。「主の目、神の目には大きく見えることが、未信者からは何でそんなことの為にと、小さく見える。クリスチャンが命がけで礼拝を守ることを、世の人は『何で?』と見る。」との言葉は印象的だった。

参加者は39名でしたが、そのうち初参加者が14名と3分の1強でした。その初参加者の方々の5名が、証と讚美の時、祈りの細胞（7グループ）から推薦されて証をしてくださいました。真に、新鮮な思いのするアシラムとなりました。これから初参加の方々が継続するよう祈ります。

そして最大のハブニングは、台風が直撃したという事でした。ニュースで台風接近が伝えられる中、充

毎年、優先的に関東アシラム会場として、山荘を用いさして下さる山崎製パンの御好意に、心より感謝申し上げます。定着した会場があるということは、準備する委員会にとっても大変ありがたい事です。今年も関東アシラムはハブニングの多い集会となりました。

開催日時・9月19日(月) 12時

日(水)

主題は「神のことばでいきる」



第3回栄光キリスト教会

ミニアシュラム報告

佐々木 雄次

満の時は皆が、今回のアシュラムにおいて与えられた恵みを分かち合うことが出来ました。しかし、台風の影響で、飛行機が飛ばず、1日、2日足止めを食った参加者もおりました。後日聞きましたが、大変ではあったが、それもまた恵みを味わう出来事となったということでした。そのように受け止められる、恵まれた信仰のゆえに感謝！ハレルヤ！

当教会のミニ・アシュラムは、一〇月九、一〇日、助言者に日本基督教団横浜岡村教会牧師安藤脩先生をお迎えし、四一名(うち他教会からは八教会、一五名)が参加して、開催されました。

安藤先生は、初日の福音の時には御自分が洗礼に導かれた経過を話されました。高校三年生の夏休みまでは、防衛大学を受験しようと考えていたが、夏休み後の九月頃になって、無性に「歌を唱いたい」という思いから、宮崎大学を受験するようにになった。また、大学に入つてすぐ、先輩に誘われ、大学のキリスト教学生会の新生歓迎コンパに出席し、初めて聖書に触れたが、先生をコンパに誘った先輩は、その一回だけしか出席しなかった。つまり、それはたった一回限りの機会だったのである。その後、キリスト教学生会で聖書に接する中、自分の罪を示され、教会に集い、洗礼に導かれたが、これらのことは、神さまが導いてくださったと考えないなら、分らないことである。確かに、自分で考え、選択したことであるが、自分が選択する以前に、神さまが自分を選び、導いてくださったと信じている、このようにおっしゃりました。今回のアシュラム主題「わたしがあなたをえらんだ」にふさわしい証しであったと思います。

また、二日目の福音の時には、「キリストを生きたる」という題で、フィリピ一章二―三節により、獄屋にあつても喜んだという、パウロの生きざまについて説き明かされました。パウロにとつての喜びとは、福音の前進、その一点にかかっていた。彼は、自分に死に、キリストに生きていた。彼のうちで湧き上がるキリストにある喜びは、獄屋にあつても他の囚人などに伝わっていったのである、とお語りになりました。また、第二次世界大戦時のホーリネスへの迫害や、特に、函館で殉教した小山宗祐師についても触れられたのですが、小山師の遺体を引き取り、葬儀をされた信者の娘さんもアシュラムに出席されていたので、皆驚いた次第です。いつかこの姉妹の証しもお聞きしたいものです。

また、教会アシュラムであることから、求道者も七名出席しました。ある方は、「自分が信仰のスタート地点に立っていることを確信した」とおっしゃり、また、ある方は、「祈りの細胞で言った自分の悩みに対して、実に適切なアドバイスをいただきました、感謝だった」とおっしゃっていました。信者が恵まれただけでなく、求道者にとつても非常に有意義なアシュラムであったことを、心から感謝するものです。

各地区アシュラム等予告

●第43回城北アシュラム

とき 12年2月11日(土、祝日)

ところ 新宿西教会

●第19回東京新生教会アシュラム

とき 12年2月18日(土)〜19日(日)

立証者 横浜岡村教会員

藤山 クニエ姉

近刊図書紹介

「信仰の眼で読み解く絵画」

―ゴッホ・ミレー・レンブラント―

岡山 敦彦著

(いのちのことは社 一、三〇〇円+税)
 画像たちの描いた絵画は、彼らの生き様、人格、品性の表れです。岡山先生の永年の祈りの結果の著者です。一読をお薦めします。

▼編集後記

希望の新年を迎えました。
 愛兄弟のご協力を感謝し祝福を祈り申し上げます。YY.

〒一八一〇〇一 三鷹市井口3-15-6
 池の上キリスト教会内
 日本クリスチャン・アシュラム連盟
 振替口座 東京〇一〇〇一―四五五八